

グループ表現セラピーによる専門家養成プログラムにおける 参加者の変容プロセス

— 複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach) を基に —

岡本 悠¹・小玉 紗織²・津田 友理香³・成田 彩乃⁴・いとう たけひこ⁵・井上 孝代⁶

- 1) 社会福祉法人 諸岳会 母子生活支援施設 アーサマ総持寺、2) 練馬区立学校教育支援センター、
3) 国立研究開発法人 国立国際医療研究センター病院、4) 捜真学院、5) 和光大学、6) 明治学院大学

問題と目的

日本では、被災者支援や、深刻な虐待の問題など、トラウマ（心的外傷）の心理的ケアの重要性が高まっている。そのような中で、日本イスラエイド・サポート・プログラム (JISP) が主宰する Japan International Center for Trauma-care and Emergency Relief (JICTER) では 2014 年 10 月よりイスラエル人講師を招いて、体験を重視したグループ表現セラピー (Group Expressive Therapy) による PTSD/トラウマケア専門家養成プログラムを提供している。

本研究は、同トレーニングプログラムの参加者の心理的変容を質的に明らかにすることを目的として行われた。

方法

トレーニングプログラムは、2014 年 10 月から 2015 年 4 月までの間、アートセラピー、サイコドラマ、ミュージックセラピー、ビブリオセラピーなどをグループで体験的に学ぶ形式で行われた。頻度は月に一回であり、7 回に渡って開催された。

インタビューは、7 名（男性 2 名、女性 5 名）を対象に、2 回ずつ行った。1 回目は、プログラムについての語りを聴取し、2 回目は、その語りの逐語データを基に、内容の確認作業を行った。全インタビューの 2 回目のインタビューを終了した後、TEA の手法に基づいて分析を行った。なお、インタビューに先立ち、全てのインタビューに倫理的配慮についての説明を行い、同意を得た。

結果と考察

複線径路等至性アプローチ (TEA: サトウ, 2015) の手法に基づき、インタビューの変容プロセスを可視化し、Figure 1 に示した。それによると、参加者は、周囲の目が気になりつつも、グループ表現セラピーの【ワークに楽しく参加】する中で、【非言語的な自己表現を体験】し、【心地よい疲れ】か【不快な疲れ】を体験する。そうした体験の積み重ねの中で、一個人としての【自分への気付き】を得て、それを受けとめることで【専門家としての気付き】

を得るというプロセスが示された。そのプロセスを促進する要因としては、【ファシリテーターからのサポート】、【表現セラピーによる刺激】と【表現セラピーによる直面化】、気付きを受けとめる【準備性】があるものと推測された。また、プロセスを阻害する要因として、作品の出来・不出来への【評価懸念】や、自身の【内面が出ることの恐れ】、気付きを否認するような【心理的防衛】があるものと推測された。また、全体的に、グループ表現セラピーのワークショップの体験回数が多い参加者の方が、少ない参加者に比べて、上記のプロセスが進展する傾向が見られた。この説明モデル (TEM) は、トラウマケア専門家養成にとどまらず、様々な目的のグループ表現セラピーのトレーニングプログラムに適用可能であろう。

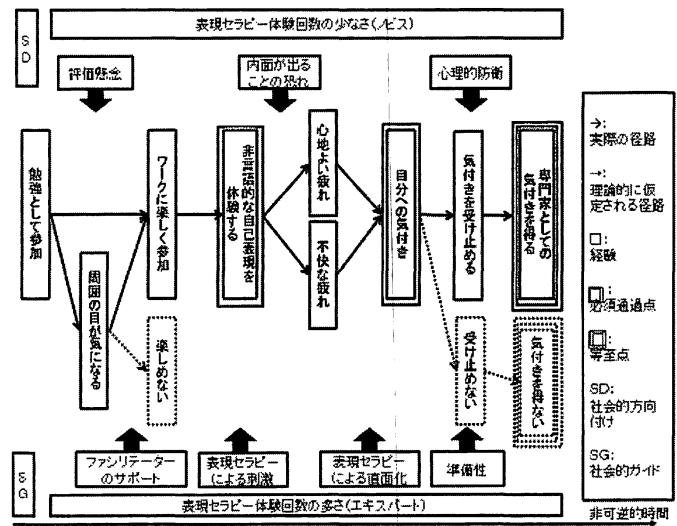


Figure 1 参加者の変容に関する TEM 図

文献:

サトウタツヤ (2015). 複線径路等至性アプローチ コミュニティ心理学, 19(1), 52-61.

キーワード:

トラウマケア、表現セラピー、トレーニングプログラム